The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	バクトリア語文書研究の近況と課題
Author(s)	吉田, 豊
Citation	内陸アジア言語の研究. 2013, 28, p. 39-65
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69754
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

バクトリア語文書研究の近況と課題

吉田　豊

0　はじめに

1990 年代に入って，動乱のアフガニスタンから，イスラム以前の時代にかかわる 3 種類の特筆すべき文書群が現れた．一つはガンダーラ語で書かれた仏典で，ワシントン大学の R. Salomon 教授のグループが精力的に研究成果を発表している．後にパキスタンでも類似のガンダーラ語仏典が発見されている(1)．もう一つは Schøyen コレクションと呼ばれる梵語の仏教写本群で，日本では松田和信教授が発見当初から研究グループの一員となり，一般向けの解説などでも研究動向を紹介された(2)．三つ目がこの論考のテーマであるバクトリア語の資料である．現在では 150 点を超える文書と，カニシカ王時代の Rabatak 碑文，8 世紀初頭の Tang-i Safedak 碑文という二つの碑文が知られている(3)．碑文をのぞけば，これら 3 種類の資料はどれも骨董市場に於いて

---

(1) これらの資料に関する新しいプロジェクトがドイツで発足し，そのニュースレターが 2013 年 1 月に発行されている．以下のアドレスからダウンロードできる（2013 年 3 月 18 日閲覧）：http://www.badw-muenchen.de/aktuell/akademie_aktuell/2013/heft1/

(2) 松田和信「中央アジアの仏教写本」『文明・文化の交差点』新アジア仏教史，第 5 巻，東京 2010, pp. 119-159 を参照．ここにはガンダーラ語仏典に関する解説も含まれている．松田による「アフガニスタンの仏教写本――バーミヤーンの大発見」『仏教通信』第 35 号，2012, pp. 11-23 にも興味深い紹介文がある．

(3) 文書は本稿のテーマであるので，二つの碑文に関してのみ関連する研究を紹介しておく．ラバタク碑文の最も新しいテキストと翻訳は N. Sims-Williams, “The Bactrian inscription of Rabatak: a new reading”, *Bulletin of the Asia Institute* [= *BAI*] 18 2004[2008], pp. 53-68 にある．Tang-i Safedak 碑文の研究は J. Lee and N. Sims-Williams, “The antiquities and inscription of Tang-i Safedak”, *Silk Road Art and Archaeology* 9, 2003, pp. 159-184 にある．バクトリア語銘文の地理的広がりという

買い取られたものであって，出土地や出土状況などに関する学術的に信頼できる情報はない．

1 バクトリア語資料の発見と研究の進展

バクトリア語は，古代のオクサス河（現在のアムダリア）流域で話されていたイラン系の言語で，ギリシア文字で表記されている．紀元後 2 世紀，クシャーン朝盛時の王カニシカが発行するコインでは，当初ギリシア語で書かれていた銘文が，後にバクトリア語に変わっているから，この頃から組織的なバクトリア語使用が始まったものと推定される．現在知られている限り最古の資料は，カニシカの祖父に当たる Vima Taktu の碑文で，西暦 104/5 年のものである(4)．草書化したギリシア文字は印章などに認められ，古くは誤ってエフタル文字とも呼ばれたが，ごくわずかな銘文から文字を読み解くことすら困難であった．1950 年代に入って，草書ではなく文字の読みが容易なギリシア文字で表記された(5)，所謂スルフ・コータル碑文が発見されるに及んで，ようやくこの言語についての理解が深まり，碑文の内容を明らかにした W. B. Henning が，Bactrian という名称を与えた(6)．ただその後は新しい資料が発見されず，バクトリア語についての知識はこの全 25 行の碑文から得られ

点では，カザフスタンとアフリカ東海岸のソコトラ島で発見されたものが，短文ながら興味深い．前者は未発表だが，後者に関しては N. Sims-Williams, “Greco-Bactrian/Brāhmī biscriptual inscription”, in: I. Strauch (ed.), *Foreign sailors on Socotora. The inscriptions and drawings from the cave Hoq*, Bremen 2012, pp. 202-203 を参照せよ．

(4) Cf. N. Sims-Williams, Bactrian historical inscriptions of the Kushan period”, *The Silk Road* 10, 2012, pp. 76-80.

(5) Monumental script と呼ばれ，文書に見られる cursive script（草書）と区別される．ただこの書体は初期の碑文に限られ，確立した書体として長く使われることはなかった．

(6) Cf. W. B. Henning, “The Bactrian inscription”, *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* (= *BSOAS*) 23, 1960, pp. 47-55. この碑文の最新の英訳は上記の Sims-Williams 論文（注 4 参照）にある．

る情報に限られていた[7]．言語学的に見ると，バクトリア語は東イラン語に分類される音声特徴を示すが，文法や語彙ではその北に位置するソグド語，西に位置するパルティア語などと共通する性質を持ち，まさにバクトリアという場所にふさわしい言語特徴を示している．パミール地域で話されている現代のイラン系言語との類似もまた特筆される．

なお，地域名としての「バクトリア」は紀元前には廃用され，現在はバルフという都市の名前に受け継がれている．地域名としては「トカラ」ないしは「トカリスタン」がその後は使われた．『史記』の「大夏」や，玄奘の「覩貨邏」（『唐書』では吐火羅）がその漢字による音写である．

新出のバクトリア語資料の研究を担当したのは N. Sims-Williams で，1996 年以降，陸続と研究成果を発表してきた．氏は 1997 年には Rabatak 碑文の解読論文によって平山郁夫賞を受賞し日本にも来られたが，そのときの講演の熊本裕による翻訳が「古代アフガニスタンにおける新知見」『ORIENTE』16 号, pp. 3-17（1997 年 12 月）に掲載されている．ほぼ同じ内容の小冊子も同じ年に刊行されているが（*New light on ancient Afghanistan: the decipherment of Bactrian,* London 1997）[8]，新しく発見されたバクトリア語資料についても今なおもっとも便利な解説であろう．その中で，出土地の分かっていないこれらの文書が，そこに見られる地名から，ローブ地方の町の Madr や Kah と関連することが分かるとしていた．後に，それら以外に少数ではあるがバルフのさらに西，Guzgan で書かれた文書もあることを明らかにした[9]．

まとまった研究としては 2001 年に刊行された *Bactrian documents* I, London 2000[2001]（以下 BD I）がある．これは契約文書や領収書など，公的な性質

---

(7) ちなみに筆者の辞書項目「バクトリア語」（『三省堂言語学大辞典』第 3 巻，1992, pp. 111-115）は，この段階で書かれた項目である．

(8) 改訂版は V. Hansen (ed.), *The Silk Road. Key papers*, vol. I, Leiden/Boston 2012, pp. 95-114 にある．文書の年代などについての重要な変更を含んでいる．

(9) N. Sims-Williams, “Nouveaux documents bactriens du Guzgan”, *Compte rendus de l’Académie des Inscriptions et Belles-Lettres* (= *CRAI*), 2002[2004], pp. 1047-1058]; idem., “Bactrian leagal documents from 7th- and 8th-century Guzgan”, *BAI* 15, 2001[2005], pp. 9-29.

の文書の集成であった．これらの文書では多くの場合，いわゆるバクトリア紀元による紀年があり年代が判明する．パキスタンの Tochi 渓谷でみつかる，バクトリア語，アラビア語，梵語の 3 言語併用碑文の分析から，この紀元は西暦 233 年を初年とすると考えられたが，その後の研究でこの見解は改められ，2007 年以降は 223 年が初年であるとされている(10)．これはササン朝の成立した年を初年とするものである．233 年説が採用されていたときには，その年はクシャーン朝がササン朝に征服された年に当たると見なされていた．

残りの文書は大半が手紙であるが，それらは *Bactrian documents* II, 2007 において発表された．この本には文法解説以外にも，BD I の語彙も含まれていて，この段階で，新出のバクトリア資料の全貌が明らかになったといえる．その後 2010 年にはバクトリア語文書や碑文だけでなく，印章や貨幣の銘文までカバーする人名研究が発表されている(11)．そして 2012 年になって，当初から予告されていた写真版である *Bactrian documents* III が刊行され，これらの文書が市場に現れてからほぼ 20 年で，テキスト，翻訳，文法，語彙，人名辞典，写真版のすべてが出そろった形になった．その一方で，この間には BD I が品切れになっていた．刊行後多くの改善や訂正が Sims-Williams 自身によって，一部にはこの本に対する書評において提案されており，Sims-Williams はそれらを盛り込んだ BD I の改訂版を BD III の直後に刊行した（ここでは BD I^2 と略す）．ただここには当初の BD I にあった，文法解説や，語彙，索引などは含まれていない．それらは BD II において発表されているからである．ちなみに筆者も BD I に対する書評を発表したが，それも含めて実に 10 件もの書評が発表されていたというから，学界における関心や影響のほどが知られる，cf. BD II, p. 7．なお BD I^2 および BD III に対する筆者の書評は *BSOAS* 76/1, 2013, pp. 156-159 において発表されている．

一部のバクトリア語文書と同じ場所で発見されたと考えられる，アラビア

(10) この点については F. de Blois, “Du nouveau sur la chronologie bactrienne post-hellénistique: l’ère de 223/224 ap. J.-C.”, *CRAI*, 2006/II [2008], pp. 991-997 を参照せよ．

(11) Sims-Williams, *Bactrian personal names*, Iransiches Personennamenbuch II/7, Vienna 2010 [= IPNB II/7].

語文書も 32 点存在する．それらは税の領収書や奴隷の解放文書で，ヘジラの 138-160（西暦 755-777）年の文書である．領収書を発給されているのは，同じ時代のバクトリア語文書にも現れる一家であり，この地域の歴史を考える上で非常に興味深い一次史料であることは言うに及ばない．それらのテキストと翻訳及び詳細な研究は J. Khan によって 2007 年に発表された(12)．その結果，関連する資料でいまだに発表されていないのは，バクトリア語文書に付随していた印章についての J. Lerner の研究と，併出したパフラビー文書（DOC. 129）に関する研究である．前者については予備的な報告が発表され(13)，後者についての口頭発表は 2008 年 1 月 25-26 日に Cambridge で開催された Bactrian Chronology Workshop において D. Weber が行っている．これらも近い将来発表されるであろう．

BD I（およびその改訂版の BD I^2），II, III, IPNB II/7 および併出のアラビア語文書の研究の発表をもって，一連の研究は一応の完成を見たと言え，今後はこれらの成果をふまえた新しい研究の段階に入ることになった．写真版は，世界中に散らばった文書の所有者から提供されたまちまちの質の写真をもとに，アート紙を使わずモノクロで印刷しているだけでなく，文書のしわが延ばされていなかったり，折れ曲がった箇所をそのまま撮影したりと，必ずしも最良の質ではないが，大半の文書と Sims-Williams のテキストを比べてみるには問題がない．これ以前にも何点かの文書は既に写真が公開されてはいたが，今回すべてが提供された意義は高い．実際，市場には偽物も流通しているようで，筆者もある骨董商から鑑定を依頼され偽物を見たことがある．実物を見慣れていれば間違うはずもない稚拙なものだが，実物と誤って写真

(12) J. Khan, *Arabic documents from early Islamic Khurasan, Studies in the Khalili Collection*, Vol. V, Oxford 2007.

(13) J. Lerner, “An introduction to the sealings on the Bactrian documents in the Khalili collection”, in: M. Compareti et al. (eds.), *Erān ud Anērān: Studies presented to B. I. Maršak on the occasion of his 70th birthday*, Venice 2006, pp. 371-386.

を掲載した研究者さえいることを思えばなおらさらである[14]．またこの写真の中には，Sims-Williams が非バクトリア語文書と呼ぶ，草書体のバクトリア文字で描かれた文献が 4 点（BD III, plates 228-230）収録されていることにも注意を喚起しておきたい．

2　付随する研究とその成果

この間には，一連のバクトリア語文書の研究で得られた草書体の文字の書体と，バクトリア語そのものに対する理解の進展を背景として，Sims-Williams はこれらの文書以外の資料の研究も精力的に行っている．過去 5 年ほどに限って特筆すべき成果をまとめる．まずベルリンのトルファンコレクションのなかにあるマニ文字で書かれたバクトリア語文書の公刊があげられる．まさに「天下の孤本」であるこの写本は，スルフ・コータル碑文とほぼ同時期に発見されたものだが，わずかの引用をのぞけば全貌は不明であった．それが 2009 年になって詳細な注と語彙をともなって発表された：“The Bactrian fragment in Manichaean script (M 1224)”, in: D. Durkin-Meisterernst, et al. (eds.), *Literarische Stoffe und ihre Gestaltung im mitteliranischer Zeit*, Wiesbaden 2009, pp. 245-268．引き続いてマニ文字とバクトリア語の音素の関係についての論文も発表された：“Remarks on the phonology of the Manichaean Bactrian fragment (M1224)”, in: *Leksika, ètimologija, jazykovye kontakty. K jubileju doktora filologičeskix nauk, professora Džoj Iosifovny Èdel’man*, Moscow 2011, pp. 244-251. 印章に刻まれた名前は IPNB II/7 に収録されているが, A. ur Rahman 氏所蔵の印章銘文の研究は次の本にある：J. Lerner and N. Sims-Williams, *Seals, sealings and tokens from Bactria to Gandhara (4th to 8th century CE)*, Vienna 2011．Sims-Williams によれば印章の銘文は，これも含めて現在までに 120 点ほどが確認されるという．ただ彼の新しい読みはいろい

(14) Cf. G. D. Davary, “Discovery of historical monuments in Afghanistan”, in: H. Eichner et al. (eds.), *Iranistik in Europa — Gestern, heute, morgen*, Vienna 2006, pp. 47-59, esp. p. 59, Fig. 14.

ろな場所で発表されており，全点をあげるのは煩雑であるので控える．テルメズの仏教遺跡でみつかる土器に書かれた銘文には以下の研究がある：Sims-Williams, apud G. Fussmann (eds.), *Monuments bouddhiques de Tremez I: Catalogues des inscriptions sur poteries*, Paris 2011．コインの銘文についても折にふれ言及しているが，ウズベクで発見されたコインのカウンターマークの読みは次の本に引用してある：L. Baratova et al. (eds.), *Sasanidische Münzen und ihre Imitation aus Bukhara, Termes und Chaganian*, Vienna 2012. ちなみにイスラム時代に入ってからのコインのバクトリア語銘文については次の研究が重要である：Sims-Williams, “The Arab-Sasanian and Arab-Hephthalite coinage: a view from the East”, in: É. de la Vaissière (ed.), *Islamisation de l’Asie centrale. Processus locaux d’acculturation du VIIe au XIe siècle*, Paris 2008, pp. 115-130.

従来から知られている重要な資料で，未だに新研究が発表されていないものには Tochi 渓谷の碑文がある．これはバクトリア語の資料の中ではもっとも遅い時代のもので，現在は 9 世紀中頃（840 年および 853/4 年）に比定されている．それについても上述の Bactrian Chronology workshop で，Sims-Williams による予備的な発表があった．ヤールホトと楼蘭でみつかった紙文書も何点か知られている．その内の 2 断片についての詳しい研究があるが, 残りはまだ発表されていない：Sims-Williams: “Two Bactrian fragments from Yar-khoto”, in: D. Durkin-Meisterernst et al. (eds.), *Turfan revisited*, Berlin 2004, pp. 325-332．ちなみにここで発表された 2 断片はその形状から判断すると，巻子本であったらしいが，その作り方は敦煌出土のチベット語の『無量寿宗要経』のそれと同じように見える．左から右に横書きする文字の巻子本の作り方として非常に興味深い．

上でも述べたように 2007 年の BD II の刊行をもって，文書の研究は一段落したわけで，実際には言語面での研究はこの時点から新段階に入ったと言える．言語面でも特筆すべき新研究が 2010 年頃から出て来ている：S. Gholami, “Ergativity in Bactrian”, *Orientalia Suecana* 58, 2009, pp. 132-141; idem, “Demonstrative determiners and pronouns in Bactrian”, in: Ch. Allison et al. (eds.), *From Daēnā to Dīn. Reloigion, Kultur und Sprache in der iranischen Welt*, Wiesbaden

2009, pp. 19-26; idem, “Definite articles in Bactrian”, in: A. Korn et al. (eds.), *Topics in Iranian linguistics*, Wiesbaden 2011．Sims-Williams 自身の“Differential object marking in Bactrian”, *ibid.*, pp. 23-38 は特に重要で，BD I[2] の翻訳にはこの最新の研究によって改善されている部分がある．文字と発音の関係は，上述の Sims-Williams の論文“Remarks on the phonology of the Manichaean Bactrian fragment (M1224)”が参考になる．一般言語学的な見地からは，BD II, p. 44 で記述された語尾-agiによる未来分詞が興味深い．これは本来は非定形（infinite）の分詞が定形の機能を果たしており，言語学的には“insubordination”ないしは“desubordination”と呼ばれる比較的に珍しい現象である(15)．なお形式的にみれば-ky(’)で終わるソグド語の absolutive（「～して（から）」）と同じであり，同源の語尾ではないかと思う．ソグド語との関連で言えば，最近ザラフシャン河上流の遺跡で発見されたソグド語木簡に見つかった液量の単位 tsk を，Sims-Williams はバクトリア語の tasko と比較した(16)．あきらかにバクトリア語からの借用語である．

歴史学の方面で特筆すべき研究は Sims-Williams, “Sasanians in the east. A Bactrian archive from northern Afghanistan”, in: V. Sarkhosh Curtis et al. (eds.), *The Idea of Iran III: The Sasanian Era*, London 2008, pp. 88-102 である(17)．これはバグラーン平原が Kadagstan と呼ばれたことがあったことを指摘したもので，考古学者の F. Grenet，古銭学・印章学の R. Gyselen との共同研究の成果の一つである．それによればバグラーン平原は，この地域のいわば「中原」

(15) Cf. N. Evans, in: I. Nikolaeva (ed.), *Finiteness*, Oxford 2004, pp. 366-431 および Th. Perrart, “Converbs and their desurbordination in Ogami Ryukyuan”, 『言語研究』142, 2012, pp. 95-117.

(16) P. Lurje, “Sogdijskie dokumenty iz raskopok rannesrednevekovogo Martškata”, in: *Indoevropejskoe jazykoznanie i klassičeskaja filologija — XVI. Materialy čtenij, posvjaščennyx pamjati professora Iosifa Moiseeviča Tronskogo 18-20 ijunija 2012 g.*, Moscow 2012, pp. 433-460, esp. p. 448, n. 21.ちなみに筆者は写真だけが発表されているムグ文書の 1 点にすでに tsk を発見していた．Cf. Yoshida *apud*, ibid.なお本稿ではバクトリア語の表記にはギリシア文字を使わず，対応するローマ字で転写する．

(17) Sims-Williams, “Kadagistan”, in: *Encyclopaedia Iranica,* XV/3, 2009, pp. 324-325 も参照．

として機能していたらしく，歴史を考える上で重要な意義がある．これに触発された宮本亮一はこのテーマについて最近研究発表を行い，近く論文の形で発表されると聞く．近年のバクトリア語文書研究に啓発された歴史についての論文は M. Alram et al. (eds.), *Coins, art and chronology II: The first millennium C.E. in the Indo-Iranian borderlands,* Vienna 2010 において多数発表されている．これらは古銭学や印章学を援用した研究で，今後この方面の研究はさらに活発になるであろう．とりわけ従来なぞの多かったエフタルやキダーラといった，いわゆる中央アジアのフン族の歴史の解明が期待される．ちなみにこの本は稲葉穣も編者に名前を連ねており，2 本の論文を発表している．その日本語版も別に発表されている．ここでは日本語版を紹介する：「泥孰攷」『東方学報』京都 85, 2010, pp. 692-674；「8 世紀前半のカーブルと中央アジア」『東洋史研究』69/1, 2010, pp. 1-24.

２－１　バクトリア語手紙のレイアウトについて

ここで BD III に発表された写真および手紙文書のレイアウト（ibid., pp. 9-12）を参考にした，手紙の体裁の伝統についての筆者の研究を紹介しよう．Sims-Williams はバクトリア語の手紙文書に，format 2 および format 3 という 2 種類の体裁があることを指摘する．前者は羊皮紙一面に端から端まで書くものであるが，後者は非常に特殊で，横長の長方形の羊皮紙の左端に余白を残して左から右に進む行を書き進む．もしも下の端まで書いて書き足りなければ，左端の余白を使い上から下へ書き進む．ソグド語には古代書簡と呼ばれる 4 世紀初めの手紙が知られている[18]．敦煌の西，古代の玉門関を守る烽燧の遺跡で A. Stein が発見したものであるが，比較的保存の良い手紙の 1 通（Ancient Letter II）をのぞけば，バクトリア語の format 3 の体裁で描かれている．ソグド文字は当時右から左に横書きしていたので，残す余白は右端にできるが，上から下へ書き進んで書き足りなかった場合には，この右端の余白に上から下へと書く．この一致は偶然ではありえないであろう．

---

(18) Cf. Sims-Williams, “Ancient Letters”, *Encyclopaedia Iranica* II/1, New York 1985, pp. 7-9.

実際エジプトで発見されたアケメネス朝時代のアラム語の手紙には，この体裁のものが認められるから[19]，このレイアウトはアケメネス朝時代の書記の伝統を受け継いだものであり，バクトリアでは，その後ギリシア文字の表記に移行したために，アラム語やソグド語の手紙と鏡像関係の体裁になったと考えれば良いだろう．バクトリア語やソグド語の手紙で用いられる定形句にもメソポタミア以来の書記の伝統があったことが指摘されているから，それと軌を一にする現象である[20]．

ソグド文字は後に縦書きになるが，古代書簡に見られたこのレイアウトはその後見られなくなる．例えば 8 世紀初めのムグ文書およびそれ以降の手紙は，目上の人が宛先の場合平出し，送り手の部分はインデントする体裁を用いる．明らかに漢文の影響に違いないこの書式が何時成立したかは不明だが，バクトリア語の文書にこの体裁をとるものがあることは興味深い．それは 771/2 年の文書で（BD I^2, Document Y），正確には手紙ではないが，文書の発行者である王の名前を含む部分が平出され，発給対象者の部分がインデントしている．これはむしろソグド語文書，ないしは漢文文書の影響を考慮すべきであろう．

ソグド語の古代書簡は 1 通をのぞけば未開封であったが，バクトリア語の手紙も現在の所有者の手に渡った段階で 10 点近くは未開封で印章も無傷であったことも注目される．古代書簡の場合は，それを運んでいた人から郵便

---

(19) Cf. B. Porten and A. Yerdeni, *Textbook of Aramaic documents from Ancient Egypt I: Letters*, Jerusalem 1986, p. 127．最近発表されたバクトリア地区で書かれた紀元前 4 世紀の手紙も同様で，右端に余白を残す体裁になっていることは注目される：Naveh, J. and Sh. Shaked, *Aramaic Documents from Ancient Bactria (Fourth Century BCE.) from the Khalili Collections,* London 2012.

(20) Cf. Sims-Williams, “Bactrian letters from the Sasanian and Hephthalite periods”, in: A. Panaino et al. (eds.), *Proceedings of the 5th Conference of the Societas Iranologica Europæa held in Ravenna, 6-11 October 2003. Vol. I: Ancient & Middle Iranian Studies*, Milan 2006, pp. 701-713．ちなみに筆者は最近ソグド語の縦書きが始まった時期を論じる論文に於いて，このことをやや詳しく論じたことがある：Y. Yoshida, “When did Sogdians begin to write vertically?”, in: *Tokyo University Linguistic Papers* 31, *Festschrift for Professor Hiroshi Kumamoto*, 2013, pp. 375-394.

袋ごと取り上げられ後に放棄されたと推定されている[21]．バクトリア語の手紙の場合は，差出人や受取人だけでなくその書かれた時代も相当異なるようなので，古代書簡と同じシナリオは想定できないと思うが，今後文書の性格を考える上ではその点も考慮しなければならないであろう[22]．

3　今後の研究の展望（1）：歴史と社会

イスラム化以前の西トルキスタンの歴史に関しては，漢文史料を駆使した研究が日本に於いて行われて来た．ソグドについての白鳥庫吉の研究（「粟特国考」）はその代表的な例であり未だによく利用されている．また榎一雄のキダーラやエフタルに関する研究も重要で，彼による漢文史料の整理は昨今のこのバクトリア語文書に触発された歴史研究の出発点になっている[23]．同様に考古学の知識と漢文史料の知見とを駆使した桑山正進の研究もよく引用されている[24]．バクトリア語文書が現れてからは，稲葉穣の漢文文献に加えてアラビア語文献を使った研究が精彩を放ち，この分野の研究の牽引者の一人となっている．とりわけ玄奘と慧超の旅行記の記事とイスラム史料を対照し

---

(21) Cf. Sims-Williams, “Ancient Letters”, *Encyclopaedia Iranica* II/1, 1985, p. 7.

(22) ちなみに注 19 で紹介した，バクトリアに由来するアラム語文書でも未開封の手紙があり，著者たちは実際に出された書簡ではなく，差出人側で保管した副本であろうと推定している．

(23) 榎の一連の研究は彼の著作集（『榎一雄著作集』第 1–3 巻，東京 1992-3）に収められているので，詳しくは紹介しない．榎の興味の一つはエフタル族の民族帰属であり，土着のイラン系の民族であるというのが主張であった．この問題では É. de la Vaissière の最近の研究が西洋の学界では受け入られている，cf. “Is there a ‘Nationality of the Hephthalites’?”, *BAI* 17, 2003[2007], pp. 119-132．それによれば，エフタルもキダーラも匈奴の移動に従って民族移動した部族であり，アフガニスタン北部に留まったが，その後勢力を拡大して周辺を支配したとしている．まずキダーラが勃興し，その後エフタルが起こった．このシナリオの後半部分は F. Grenet の研究成果を利用している，cf. “Regional interactions in Central Asia and Northwest India in the Kidarite and Hephthalite periods”, in: N. Sims-Williams (ed.), *Indo-Iranian languages and peoples*, Oxford 2002, pp. 203-224.

(24) 我々日本の読者にとっては，それまでの関連する研究をまとめた『カーピシー＝ガンダーラ史研究』京都 1990 が便利である．

たハラジについての研究は秀逸である[25]．上で紹介した若い宮本亮一とともに今後とも大いに活躍が期待される．

しかしながら，大きな問題もある．それは肝心の漢文史料とバクトリア語文書やコイン・印章の銘文の読みから得られる情報がうまく噛み合ないことである．また，日本にはこの地域のコインや印章を扱う研究の伝統がまったく存在しないというハンディもある[26]．地名の場合を例にすれば，玄奘の『西域記』や『唐書』の「地理志」にトカラ地域の国や城邑の記録があるが，それらとバクトリア語文書から回収される地名がうまく合致しない．筆者は BD I の書評（*BAI* 14, 2000[2003], pp. 154-159）において，oarlu を大汗都督府の活路城に比定し，そのことが Kadagstan の発見の引き金になったことはあった．Sims-Williams は lanaggo という地名由来の形容詞を月支都督府の鉢羅州の蘭城に比定した，cf. BD II, p. 225b．Guzgan = 護時犍のような従来から知られている例をのぞけば，バクトリア語文書であらたに確認された地名と，漢文史料から知られている地名と比較する作業は難航している．

バクトリア語資料と漢文史料との一致という点では，最近の研究で得られた知見を見てみよう．Sims-Williams, “The Bactrian era of 223 C.E. — some numismatic considerations”, *Proceedings of the symposium on ancient coins and culture of the Silk Road*, Shanghai 2011, pp. 62-74 は，グーズガーンの支配者のコインとコインのカウンターマーク，文書に現れる関係する人名から，当時のこの地域の支配者の名前や継承関係について考察している．それによれば 7 世紀の終わり頃には，同時期に三人の支配者を想定しなければならないという．彼は，この当時グーズガーン地域は統一されておらず，拠点を異にする複数の王が併存していたのであろうと推測している．実際，『新唐書』の地理志ではこの地域に関して次のように述べている：

---

(25) 日本語で出版されたものは「アフガニスタンにおけるハラジュの王国」『東方学報』京都 76, 2004, pp. 313-382.

(26) 平山郁夫画伯の古銭コレクションには zaboxo = Jabukha の銘文を刻したきわめて状態の良いコインがあるが，zabolo「ザーブル」と読まれている，cf.『平山郁夫コレクション　シルクロード・コイン展カタログ』東京 1993, p. 14.

奇沙州都督府，以護時犍国羯蜜城置．領州二．沛隷州以漫山城置．大秦州以叡蜜城置．（中華書局本，p. 1137）

つまりグーズガーンを中心とする地域には，奇沙州，沛隷州，大秦州の 3 州あったとしている(27)．従ってこの記事はある程度実態を反映していた可能性がある．ちなみに護時犍国の国城の羯蜜はグーズガーン地域の最重要都市 Ambīr（現在の Sar-i Pul）に対応するとされる．その三つの州がどこにあったかはよく分からない．代表的なコインの表面には zolado gōzogano「グーズガーンの Zhulād（王）」とあり，裏面には garigo šauo「Ghar の王」と発行地の名前である ambēro = Ambīr という銘文が見える．garigo「山の」から，Ambīr を中心とする地域はグーズガーンの中でも山岳地であるという認識があったのであろうか．沛隷州の国城の漫山が，イスラム時代の地理書の Manshan と一致するとすれば，そこが沛隷州であったことになる(28)． Manshan は Ambīr のさらに南である．またグーズガーン地域で書かれた契約文書には，アムダリアの流域の Kalf (Kalif)の地名をあげるものがあるから（cf. Sims-Williams, *BAI* 15, 2001[2005], p. 9），Ambīr の北側の地域も一つの州を形成していたのかもしれない．

人名研究も同様で，文書発見以前から判明していたコインの銘文の fromo kesaro = 拂菻罽娑をのぞけば，筆者が書評において提案した magatoro bokolauo = 僕羅があげられる程度である(29)．bokolauo はトルコ系の支配者で Guzgan で 695 年に書かれた Document S に現れる．阿史那僕羅は，吐火羅葉

(27) この部分の「領州二」の解釈に関しては荒川正晴，稲葉穣両氏から貴重な教示を受けた．

(28) Cf. V. Minorsky, *Ḥudūd al-'Alam. 'The regions of the world'. A Persian geography 372 A.H. — 982 A.D.*, Cambridge 1937, 2nd ed. reprinted in 1982, p. 334.この点は稲葉氏から教示を得た．Manshan の位置については Sims-Williams, "The Bactrian era of 223 C.E."に掲載された地図も参照せよ．

(29) 二つの人名と，それに関連する研究については Sims-Williams, IPNB II/7, pp. 83, 145 を参照せよ．

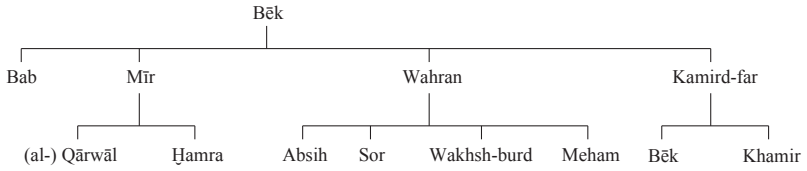
護，那都泥利の弟で，705 年に唐朝に入侍した（『新唐書』巻 221 下）．『冊府元亀』の記録に依れば，718 年に彼の兄の号令に従う吐火羅国の軍勢がどれほどかを唐朝に報告している．この bokolauo と僕羅は同一人物であると推定されている(30)．

このような状況で，今後我々日本の研究者にどのような貢献が可能かについて二つの例をあげて考えてみたい．

3－1 支配機構・社会階層：Bēk 一家の系図

J. Khan はアラビア語文書の大半が Mīr ibn Bēk にかかわる税の領抄文書であることから，彼及びその一族の系図を，アラビア語文書及び関連するバクトリア語文書（U, V, W, X, Y）を参考にしながら提案している．それによれば以下のようであった．Cf. Khan, p. 22.

〈系図 1〉



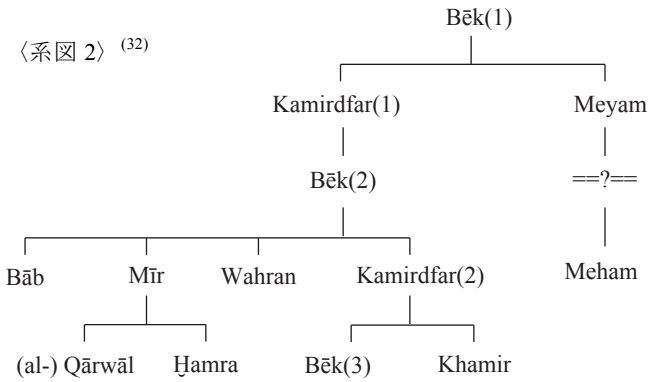
一方，Sims-Williams は IPNB II/7 のなかで人名の比定も試みており，それによれば, この一族に関する文書は Documents T, U, W, X, Y であり, Document V は含まれない．また Khan は Document T をカウントしていなかったが，これも関連する文書である(31)．第一に，Absih, Sor, Wakhsh-burd, Meham という 4 人の息子を持つ Wahran が Bēk の息子の Wahran と同一人物であることはまずあり得ない．これは文書の年代から推定されるだけでなく，4 人の息子を持つ Wahran の所有地が Spandagan と呼ばれている，別の家族であることか

(30) この記録に関しては桑山『上掲書』pp. 254-255 を参照せよ．

(31) 筆者も BD I の書評（*BAI* 14, 2000[2003], pp. 154-159, esp. p. 156a）に於いてこれらが一連の文書である事を指摘していた．

らも判明する, cf. IPNB II/7, p. 86．また文書 T を含めることによって Khan が提案する系図のさらに 2 代前まで系図をさかのぼらせる事ができる．770 年のアラビア語の領抄文書（Document 23）に現れる Meham al-Bāmiyānī は，Mīr ibn Bēk al- Bāmiyānī とニスバを共有することから, Bēk の一族とおなじ系統であると考えられる．ところでバクトリア語文書 je には Bēk の息子の Meyam とあり，この Bēk が文書 T（西暦 700 年）の Bēk と同一人物だとすれば，こちらの Meyam は 770 年のアラビア語文書の Meham al-Bāmiyānī の祖父になると推定される, cf. IPNB II/7, ibid．結局これを系図にして表せば次のようにまとめられる．

〈系図 2〉[32]



この一族に関してバクトリア語およびアラビア語文書から判明する事をまとめる．彼らは，文書 T が書かれた西暦 700 年の段階でローブ国の住人であり，その後 70 年以上ここに住み続けている．764 年以降はアラブに対して税金を納めていることが確認できる．そのニスバは Bāmiyānī であり，バーミヤーン出身であったらしい．しかも文書 T では当事者の Kamirdfar(1)は，在地

(32) 祖父と孫が同名であることが多いことは注目される．この地域の人名の顕著な特徴である．この点については上掲論文 Sims-Williams, “The Bactrian era 223 C.E.”, pp. 62-74 の p. 70 及び p. 73 n. 43 を参照せよ．

の Kamird 神に仕える神官（kedo = 計多）として，Kadagstan の王妃の息子の病気を治したことで土地の寄進を受けている[33]．王妃はハラジの王女と呼ばれている．上掲の稲葉「ハラジュの王国」は，当時は Hindukush の南にいたハラジ族の娘が結婚によって Kadagstan に来たと推定する．

この一家にかかわるバクトリア語文書は，他には Bēk(2)と Kamirdfar(2)が土地を借りて耕作する契約（文書 U, 西暦 712/3 年），兄弟の Wahran と Mīr が土地を購入する契約（文書 W, 西暦 747 年），Wahran/Mīr 側と Kamirdfar(2)/Bāb 側が兄弟で争いごとをやめる確認書（文書 X, 西暦 750 年），さらに家を出た兄弟である Bāb の負債等を，残った側の Mīr が払わなくても良いという趣旨の赦免状である（文書 Y, 西暦 771/2 年）．この兄弟はどういう理由によるものか仲が悪かったようである．この赦免状を発行しているのは Kadag の王であり，Kera Tonga Tonga Spara というトルコ語風の名前を持っているところからトルコ系の民族であったらしい[34]．つまりこの時代，Mīr ibn Bēk は Madr と Rizm の’amīr に kharāj 税を納める一方で，このような赦免状を Kadag の王から発給されている．Mīr ibn Bēk 一家はローブを中心とした領域の支配者（バクトリア語では xaro と表記され khār と発音された）が支配する Madr 付近の Asp にいたのであり，そこは Kadagstan とは別の王国であったと考えら

(33) kedo = 計多については上掲『ORIENTE』16, 1997, p. 14 を参照せよ．ちなみに日本では水谷真成訳の『西域記』（平凡社中国古典文学大系 22，東京 1971）を使うことが多いが，そこ（p. 371）では「計多外道」を「外道の人が多く」と訳している．

(34) この文書に見える namooindado abzodofarauo xagano kadagobido kadgano šauo を Sims-Williams は the king of the people of Kadag, the governor of the renowned qaghan, prosperous in glory と訳している, cf. BD I^2, p. 142．ただこれらの名詞の羅列の意味関係は一義的には決まらない．たとえば「可汗」と kadagbid が同格である可能性は完全には排除できない．ちなみに彼は ser という称号も帯びている．Kadagbid と可汗が別人であるとすれば，この時代の可汗は誰のことなのだろうか．謎である．また一方で西暦 659 年 1 月 27 日に比定される日付をもつ文書 Nn には「可汗の税 xaganaggo tōgo」に言及していて，Sims-Williams（上掲“Bactrian era of 223”, p. 66）はこの可汗を唐に滅ぼされる直前の西突厥の可汗だとして，これ以降は唐の支配下に入ったとしている．771 年の段階でも可汗はいるのであるから，事態はそれほど簡単ではなかったように見える．

れるが，このような赦免状が Kadagstan の王から発給されている事は注目される[35]．この時期はアッバース朝時代だが，それ以前，『冊府元亀』巻 999（外臣部請求）において，僕羅が兄，吐火羅葉護の那都泥利可汗の軍事力について述べた所では，謝颱国，罽賓国の兵力各 20 万以外に，旧のトカラ国に属する骨吐国，石汗那国，解蘇国，石匿国，悒達国，護密国，護時建国，范延国，久越徳建国，勃特山の王の各々5 万の兵力を含めている．アラビア語の領抄文書と文書 Y からはアラブ側の’amīr と旧の支配者（ローブの khār 及び Kadagstan の王）による二重ないし三重の支配が見て取れるが，吐火羅葉護が直轄する地域とは別の諸支配者に号令を与える事ができるとする，僕羅の伝えた内容が必ずしも根拠のないものではなかったように見える．

３–２　カラバルガスン碑文の一節から

このような背景を考慮しつつ, カラバルガスン碑文のソグド語版の 20 行目の終わりから 22 行目の初めあたりを見てみよう[36]．この箇所はウイグルの第 7 代懐信可汗（795-808）の事績について書いている部分で，（おそらく西部天山地区で), 葛禄侵攻以前に支配者であった三姓突騎施の支配者を復位したことを述べた後の記事である．

(**line 20, Frag. 7**) rtms pr mγ-wn t’z-yk’n’y (**line 21, Frag. 1**) [’x]š’w’nyh (+++)t ZY p(r)šk’r wm’t ZY prnpδy ’xšy-wn’k c’nkw c’δr xr’mtδ’rt kw xwr’s’n xm’yr ZY kw (’n)[y (**Frag. 2**) γr](β ’)wt’kcykt xm’yr ZY ’xš’w’nδ’r

---

(35) Khan は，この一族に関する税金関係の文書がアラビア語で残され，民事関係の契約文書がバクトリア語で残されている事態に関して，税金に関することはアラブだが, 法律関係では在地の支配機構の管理下にあるとしている, cf. Khan『上掲書』, p. 19.

(36) 9 世紀前半，ウイグル可汗国の首都である現在のカラバルガスンに建てられたウイグル語, 漢語, ソグド語の 3 言語併用碑文の概要や研究史については, Y. Yoshida, “Karabalgasun. ii The inscription”, in: *Encyclopaedia Iranica*, vol. XV/5, New York 2010, pp. 530-533 および吉田豊「ソグド人と古代チュルク族との関係に関する三つの覚え書き」『京都大学文学部研究紀要』50, 2011, pp. 1-42 を参照せよ．

s’r prm’nh (βr’)šy wyš’nt[(**Frag. 6**)](n)γ’wš’kt [(**Frag. 7**)]mwmyn xm’yr prm MN prnxwnt’kw ’xšy-wn’k (**line 22, Frag. 1**) [tn](s) ZY pckwyry γrβ prw’rt’k ’rp’st’k (+++++)t’ ZY (γr)’n nm’ck’n βšmtw δ’r’nt
「そしてまた，全大食の領土で・・と迫害（？）があった．天恩ある支配者（＝天可汗）は，下方（＝西方）へと進み，ホラーサーン[37]のアミールと他の[多くの]地方のアミールおよび王たちに命令を送った．（欠落）マニ教の一般信者たちは（欠落）カリフまで，天寵ある支配者（＝天可汗）への[苦慮]と恐れから何度も強力な・・・と多くの貢ぎ物を送った（3 pl.）．」

三姓突騎施の支配者の復位の記事がある漢文版の 21 行目の直前の 20 行目に次のように見える．

（欠損）攻伐葛禄・吐蕃，搴旗斬馘．追奔逐北，西至拔賀那國．（剋）獲人民，及其畜産．葉護爲不受教令，離其土壤．（以後欠損）

逃走する葛禄と吐蕃を追撃して「西して拔賀那国に至る」とあるから，802 年にあったカシュガルでの対チベット戦での勝利の後に敵軍を追撃し，西のフェルガナに入ったことが分かる[38]．その後に突騎施の支配者の記事があるのであるから，上で引用したソグド語版が伝える内容は，802 年以降であり，懐信可汗（在位 795-808 年）の支配の最晩年の記事であったようだ．この後には下方地域（つまり西方？）に巨大なマニ教の宗教施設を建てたことが記されている．それにつづく 23 行目には，マニ教の繁栄を述べたあとで，

(37) ここの「ホラーサーンのアミール」はアッバース朝のホラーサーン総督のことに違いない．xwr’s’n はソグド語の単語ではなく，ペルシア語の地域名を借用した形式である．この地名が指示する地域については Khan, p. 13 も参照．

(38) この事件と年代については Y. Yoshida, “Karabalgasun Inscription and the Khotanese documenrs”, in: D. Durkin-Mesterernst, Ch. Reck, and D. Weber (eds.), *Literarische Stoffe und ihre Gestaltung in mitteliranischer Zeit,* Wiesbaden 2009, pp. 349-360 を参照せよ．

[’βc’np]δy xr’mty L’ wm’t「（可汗はまだ）この世を去っていなかった」とあることも参考になろう．その直後に懐信は他界し，碑文のこれ以降には第 8 代保義可汗独自の事績が記されていたと考えられる．

カラバルガスン碑文の記事で注目されるのは，ホラーサーンのアミールの他に各地のアミールおよび’xš’w’nδ’r「王（原義：領土を持つ者）」に命令を下したと言っている事で, Khan が研究したアラビア語文書のなかで徴税する側になっているローブ地区のアミールがまさにこの「各地のアミール」に対応するだろう．一方「各地の支配者」とは，ローブの khār のような在地の支配者であったと考えられる．この記事からもこの時代この地域の二重支配の様子が読み取れると考える(39)．

上でも既に指摘したように，トカラ葉護である那都泥利は，自らが支配している地域（あるいは旧の都督府下の地域）以外にグーズガーンやカピシーまでを含むトカラ全域に号令が及ぶと言っている．つまり彼が全土の代表として，地方地方の王を統括する役割を果たし得たことを示唆している．先にも述べたようにローブの khār の直接支配下にあったはずの Mīr ibn Bēk は，兄弟の借金の支払い免除をローブの khār ではなく，Kadagstan のトルコ系の王から得ていた. Kadagstan の王が一時ローブを直接支配していたのでなければ(40)，何らかの中央集権的な機能を Kadagstan の王が担えたことを示唆するようにも見える．ローブの khār が帯びたことのある，「エフタルのヤブグ，トカリスタンとガルチスタンの裁判官」という称号は(41)，実職ではなく在地の王レベルの支配者に，エフタルの最高権力者から与えられた尊称であったのではないだろうか．

---

(39) もとよりウイグルの可汗の実効支配がホラーサーンに及んだ訳ではなかったろうが，その影響は確実に届いていたと考えられる．この時期のウイグルとホラーサーンとの関係については吉田豊「カラバルガスン碑文のソグド語版について」『西南アジア研究』第 28 号，1988, pp. 24-52 特に p. 29 を参照せよ．

(40) 年代が分かる文書では Roboxaro はバクトリア暦の 525 年 Pusig 月（西暦 747 年 8/9 月）まで確認できる．

(41) 文書 jb 2-3 行目に toxoarastano garsigostano ladobaro とある．別に ēbodaloxoēaggo labiro「エフタルの領主の書記」とも呼ばれている．

3–3 Kadagstan からの手紙

ここでバクトリア語文書から，この点について少し考察してみよう．バクトリア語文書の手紙には, kadagbid が差出人になっているものが 10 通見られる[42]．それらは，Keraw Ohrmuzdan が差出人の cr-de，Meyam が差出人の ea, ed，Kilman が差出人の ja，および上述の文書Ｙである：cr（380 年, 7/8 月）, da（421 年, 4/5 月），db, dc, dd（421 年，5/6 月），de（422 年，3/4 月），ea（461 年，12 月あるいは 462 年 1 月），ed（475 年，1/2 月あるいは 465 年 1/2 月），Y（771/2 年）.

受取人の住地が判明している文書Ｙ以外でも，これらが一連の文書群の中にあるということは，ローブ地域にいた受取人に宛てられていたことを示唆するであろう．このこともローブ地域が kadagbid の支配下にあったことを示すのではないだろうか. 現在考えられているように kadagstan が Baghlan 平原にあったのなら，唐の西域十六都督府の大汗都督府にあったことになる．他の位置の判明している都督府を参考にすれば，大汗都督府は護時犍国がある奇沙州都督府と西の端で接したことになるから，ローブの地域は大汗都督府の 15 州の一つであったと見られる．これらの手紙はそこの中心であった kadagstan のトップである Kadagbid からローブ地域の住民に宛てられた命令である. これらの手紙が書かれた個々の時にローブの Khār が存在したかは確認できないが，4 世紀の終わりから文書Ｙが書かれた 8 世紀の後半まで，ローブ地域が Kadagstan の支配者の強い影響下にあったことが推測される.

実は，バクトリア語文書のなかで，「～から～へ：aso NN abo NN」のように差出人から始まる手紙は，上の 10 通以外にもう 1 通知られている．それは文書 ba で，差出人の一人はクシャーン・シャーである[43]．文書 cl と cm の

---

(42) バクトリア語文書のなかの kadagbid や kadagstan については宮本が研究を発表しているが，ここでの議論はそれとは重複しない．なお，丸括弧の中は，文書に紀年が残されている場合，それを西暦に換算したものである.

(43) これは Sims-Williams の復元によっている．彼によればクシャーン・シャーを通じて送られて来たという復元も推定されるという，cf. BD II, p. 52．どちらにしてもクシャーン・シャーないしその一族からの手紙である.

ようにローブの Khār が差出人の手紙もあるが，その場合でさえ Khār の名前が冒頭に来る書式ではない．Kadagbid の地位がクシャーン・シャーに匹敵していることも参考になる．クタイバとの戦いに敗れ 710 年に殺された Nēzak Tarkhan については，タバリーの記事にローブの khār が Nēzak Tarkhan を裏切ったように書いてある．F. Grenet（上掲論文，pp. 214-218）は Nēzak Tarkhan は大汗都督府を拠点にしていたと推測しているが，ここで想定したローブと Kadagstan の間の従属関係を考慮すれば，ローブの Khār の行為は裏切りのように記録されてもなんら不思議ではない(44)．

Kadagbid を頂点とする重層支配の様子は，Schøyen コレクションの銅板銘文からも推測できる．これは仏塔を寄進した際に奉納された縁起文である．寄進したのは Tālakān の王（tālagānikadevaputraṣāhi）であるが，彼は奉納者のリストの冒頭に自分と家族の名前，さらに仏教関係者を掲げたあとで，Khingila, Toramana, Mehama, Javūkha を大王（各々の称号は順に mahāṣāhi, devarāja, mahāṣāhi, mahārāja）として寄進者のリストに添えている．そして最後に Mehama 王の治世のことであるとしている．これを研究した G. Melzer によれば，紀年の 68 年は西暦 492/3 年に比定するのが妥当であるという(45)．有名な Khingila, Toramana, Javūkha と Mehama の関係は明らかではないが(46)，Tālakān の王が，Mehama に従属していたことは容易に推測できる．一般に考えられているように，Tālakān が Kunduz の東にあった Tālaqān のことであるなら，また Mehama が 460-470 年のバクトリア語文書に Kadagbid として現れ

(44) 言い換えれば，Nāzak Tarkhan は当時 kadagbid であったのではないかということである．

(45) G. Melzer, “A copper scroll inscription from the time of Alchon Huns”, in: J. Braavig et al. (eds.), *Buddhist manuscripts*, vol. III, Manuscripts in the Schøyen collection, Oslo 2006, pp. 251-278, esp. pp. 263-264 参照．

(46) Toramana の称号である devarāja は明らかにインドとの関係を示唆する．mahārāja の称号を持つ Javūkha もインド語の称号を帯びているのに対して，その他の二人の称号の要素の ṣāhi はイラン語であるので，イラン語圏が支配地域であったと考えられよう．Mehama は Hindukush の北の地域の支配者であるから，この推定と矛盾しない．称号と支配地域の関係について Melzer は慎重である，cf. ibid., p. 258.

る Meyam と同一人物なら，Kadagbid の称号を持つ支配者の支配権が及ぶ地域が相当広かったことが推測される．この時代はエフタルが登場していた時代であるから，Meyam がエフタルの王であり，ローブや Talakan を含む広大な地域に号令できたとしても不思議ではない[47]．ちなみに宮本は，大汗都督の主邑とされる活路に比定される Oarlu の領主（oarlogano xoddēo/oarloganaggo xoddēo）が kadagstan の spalobido「軍隊長」であることにも注目している．

筆者はかつて唐の羈縻支配下のコータンの税制などについて研究したことがあった[48]．安西都護府下のコータンでは王政が存続した一方で，唐の軍隊が駐屯した．コータンの住民はコータン国や国王だけでなく，唐の軍隊の維持の為にも税の徴収を受けていた様子が，出土するコータン語および漢文文献から明らかになった．前近代では，このような二重三重の支配は決して珍しいことではなく，バクトリアでも類似の支配があったに過ぎないが，残された資料からその実態をうかがうことはきわめて難しい．

４　今後の研究の展望（２）：漢字による音写語など

上でも述べたように，漢文史料に残されたこの時代・地域関連の音写語は少なくないが，バクトリア語文書に見られる形式を使って新たに解明されることはあまり多くなかった．筆者はこの種の文書が発表された当初すでに漢字で音写されたバクトリア語形がないか議論したことがある[49]．玄奘の掲職

---

(47) 地名の比定については Sims-Williams, apud Melzer, art. cit., p. 256 を参照せよ．É. de la Vaissière, “A note on the Schøyen copper scroll: Bactrian or Indian?”, *BAI* 21, 2007[2012], pp. 127-130 は，この Tālakān を北西インドの地名であると考えているが，ここではその説を採らない．ここで見た王の称号が ṣāhi であることも，彼がイラン語圏に属することを示唆するだろう．また仏塔が建てられた村の名前 śārdīysa もまた diz「砦」というイラン語の要素を含んでいることにも注目したい．śār はバクトリア語の xaro と同源の「支配者」を意味する語であろう．

(48) 拙著『コータン出土 8-9 世紀のコータン語世俗文書に関する覚え書き』神戸 2006；“On the taxation system of pre-Islamic Khotan”, in: *Acta Asiatica* 94, 2007, pp. 95-126.

(49) 拙稿「Sino-Iranica」『西南アジア研究』 No. 48, 1998, pp. 33-51．漢字による音写語としては，玄奘が Kapiśi の王について言及する「刹利種」もあげられよう．これ

を garsigo に比定するなど，わずかに数語を提案したに過ぎなかった．われわれ日本人が最も貢献できる分野であり，この機会にいくつかの人名の問題について考えてみよう．

（1）吐火羅磨色多

これはアスターナ出土の漢文の過所関連の文書に見える人名で，姓が吐火羅で名前が磨色多である(50)．この同じ名前は西暦 750 年頃，敦煌の従化郷にいたソグド人の人名，曹磨色多にも見えている(51)．しかし今に至るまで原語は判明していない．彼は同郷の吐火羅拂延およびソグド姓の商人とともに移動し，過所の発給を申請している．筆者の疑問は原語の問題もさることながら，トカラ出身と思われるキャラバン商人がソグド人と同じ名前を帯びることであった．ところで Sims-Williams がバクトリア語文書に見つかる人名を集めて整理したなかに，明らかにソグド語の人名があることを指摘している．その内のいくつかはさらに興味深い事に，bonosigologo という形容詞を伴っているが，IPNB II/7, p. 87 ではこれを「ソグド人の居住地」と訳し，ソグド人の集落があったのだと推測している．吐火羅磨色多もその種のトカラにあるソグド人集落出身のソグド人であったと考えれば，筆者の疑問は解決する(52)．

（2）如没払羅達

これは『冊府元亀』巻 964 に記録された，738 年に登位したザーブルの王

は一般には梵語の kṣatriya の音写とされる．しかし，玄奘は別の箇所で kṣatriya は「刹帝利」と音写するのが正しいと言っており，この説は受け入れ難い．バクトリア語で支配者を意味する xaro は，梵語と同源の*xšaθriya に由来し，アラビア語文献では š’r/šyr とも表記されている．玄奘の「刹利」はこの同じ語を音写し，「刹」の声母は語頭の子音の不安定な発音を表記する為に選ばれたのではないかと考える．

(50) 『吐魯番出土文書』7，北京 1986, p. 93 参照．この文書に関しては荒川正晴『ユーラシアの交通・交易と唐帝国』名古屋 2010, pp. 336-384 も参照せよ．

(51) 池田温「8 世紀中葉における敦煌のソグド人聚落」『ユーラシア文化研究』1, 1965, pp. 49-92，特に p. 64 参照．

(52) ムグ文書に見られる人名には，明らかにバクトリア語の人名をソグド文字で表記した wxwšwmryk = oaxšomarēgo (IPNB II/7, p. 105)のような例が知られているので，逆にソグド人がバクトリア語の人名を帯びていた可能性も排除できない．

の名前である[53]．如没の部分はザーブルを表すようにも見えるが未解決である．ただその後半部分は，azadofardaro, ašfardaro, oēšofardaro に見られるようなバクトリア語の人名構成要素である fardaro「より良い，最良」に比較できるであろう．

（3）曷擷支

これは顯慶 3 年（658 年）の罽賓の支配者の名前として『唐書』記録されている[54]．この名前は 714 年 7/8 月の紀年のある Tang-i Safedak 碑文（上掲注 3 参照）に見える，仏塔を寄進した Gazano の王の名前 alxiso に比較できる．バクトリア語では語頭の h-音は弱く発音されることがあり，例えば「千」をあらわす uazaro には azaro というバリアントがある．従ってバクトリア語表記では，語頭に一見して子音がないように見える事は大きな問題にならない．Sims-Williams は Gazano の王とは Gazna の王ではないかと考えており，むしろここでの問題はこの二人が同一人物ないしは血縁関係があったかどうかである．上でも述べたように，この地域では祖父と孫が同じ名前を名乗る事は頻繁に見られるので，その関係であった可能性もある．

（4）安楽薩丹

これは大同元年（535 年），梁に使いを使わした滑国の王の名前として，『梁書』武帝紀（中華書局本，p. 79）に記録されている[55]．安姓でソグド人であった可能性もあるが，この時期のソグド以外の中央アジアからの使者に安姓を持つ者がいるので，必ずしもソグド人である必要はない[56]．いまバクトリア語文書の人名を検索すると，家族名に sartano という形が知られている．「薩

(53) 桑山『上掲書』p. 265 参照．

(54) 桑山『上掲書』p. 266 参照．

(55) 滑国は，ヒンドゥークシュの北のエフタル本土の名前である．桑山『上掲書』p. 409 参照．

(56) 梁への末国（メルブ）からの使者に安末粢盤，波斯国からの使者に安狗越が記録されていることを河上麻由子博士から教えていただいた．前者は中世ペルシア語の marzbān「辺境侯」に比定される．確かにこの時期メルブの支配者は marzbān であった．後者の原語は Kawād であろう．これは当時のササン朝の王の名前である．これらの人名について河上博士は研究を準備中である．

丹」はそれにぴったり対応する．楽の部分は rago「平野」という名詞に由来する人名だろうか．*Rago Sartano という名前だった可能性がある．

４－１　その他

むろんバクトリア語の文法や文書の解釈そのものも今後の課題である．二つほど例を挙げておこう．文法については BD II, pp. 38-49 に記述がある．ただそこには受動態の記述が見当たらない．バクトリア語では受動態は，過去語幹と助動詞 bo-/kirdo の組み合わせによって迂言的に形成される．例文を引用する：

> tado kirēdo koado oispo abo ladokano bordo booindado (dc 4-5: BD II, pp. 102-103)
> “so you should act (in such a way) that they are taken to Ladkan.”

ほぼ同じ構文は BD II, eb 16-17 にも見える．その場合，行為者はどのように表現されたであろうか．現在までのところ行為者が表現された例は見つかっていない．ただ過去分詞と存在動詞の組み合わせによって形成する完了形は，他動詞の場合，行為の対象は文法的主語として，それが被った変化の状態として表現されるので，全体は受動の意味を持つことになるが，その場合行為者は「～から」を原義とする前置詞 aso によって表現されている：

> . . . ddraxmo koadago 3 asporigo asidaso mōiano paro kirddigo astaddindo (M 3-5: BD I^2, pp. 66-67)
> “. . . the three dirhams of (king) Kawad which had been loaned by Moyan.”(57)

受動の行為者を「～から」を意味する前置詞で表現することはソグド語と同じである．

---

(57) この場合はしかし aso môiano が「Moyan から」を意味する可能性は排除できないと思う．

文書の解釈では，契約文書の末尾に添えられる次のような文言が，筆者には不可解である．

> odo eio molrago xirsobōstigo parso togdo taooano xozo oaooaro booado sagondabo masko nabixsido
> “and this sealed document, (this) purchase contract, after the fine has been paid, shall be (considered) good (and) valid as (it) is written herein.” (Nn 29-31: BD I[2], pp. 78-79)

文書 Nn はバクトリア紀元 436 年 Ab 月の Wad 日（＝659 年 1 月 27 日）の紀年を持つ契約文書で，契約はグーズガーンの Lizg という町で交わされた．そして Nanan 家の Bay を筆頭とする Khwas の息子たちが，Bramarz を筆頭とする Lagukan 家の者たちに，金貨 25 ディナールで土地を売り渡すことになっている．上で引用したのは契約文書の最後の文言で，これに先行する一節では，当該の土地に対して第 3 者が出てきて所有権を主張して訴訟を起こした場合に，売り手側が対応し買い手に損害が及ばないようにすること；それを怠った場合には，売り手側がグーズガーンの国庫と買い手である Bramarz たちに，各々金貨 50 ディナールを支払うと約束している．その直後に上で引用した文言が続く．同工異曲の文言は他の契約文書（N, R, Tt, Uu, V, W, X）にも見られる．

この解釈で不可解なのは，契約違反の罰金を払って始めて契約が成立するような印象を与えるからである．契約そのものは，例えば売買の場合は買い手が代金を支払った段階で成立しているはずであり，違約罰はその後発生するかもしれない特別な状況である．それ故，罰金が支払われてはじめてこの契約が成立するという解釈はいかにも奇妙である．そのように考えれば，この文言は罰金が支払われた時点で契約が成立することを意味しているのではなくて，契約成立後に購入物件が売り手の所有物ではなかったことが判明するような，買い手側に不利益が発生した場合に，売り手側が代金の倍の罰金

を国庫と買い手に支払うことと[58]，それを支払った後も当初の契約は有効である，つまり買い手は買ったものを所有し続けることを明言しているように見える．従ってこの部分の英訳は次のように変更すべきではないだろうか．

> “and this sealed document, (this) purchase contract, (even) after the fine has been paid, shall (still) be (considered) good (and) valid as (it) is written herein.”

5　おわりに

上でも述べたように，写真版の公刊をもってようやくバクトリア語文書研究は一段落した．今後はこの研究にもとづく新しい研究を発表する段階に入った．これを駆使した研究が行われ，文明の十字路とも呼ばれたこの地域の4-8 世紀の言語や歴史の解明が進むこと，とりわけこの地域の歴史研究に大きな貢献をしてきた我々日本の研究者がこの方面の研究を進展させることを望む[59]．

あとがき

原稿完成後に，本文中でも言及した宮本亮一「バクトリア語文書中に見えるカダグスタンについて」『東方学報』京都 87, 2012, pp. 448-413 が発表された．

---

(58) 契約に違反した者が宮廷に罰金を支払うという規定はコータン語の契約文書の一部にも見られる．Cf. Y. Yoshida, “On the taxation system of pre-Islamic Khotan”, in: *Acta Asiatica* 94, 2007, pp. 95-126, esp. p. 108, n. 25. さらに，ニヤ出土のカローシュティー語文献や，トゥムシュク語文献にも見られることについては，D. Hitch, *Studia Iranica* 17, 1988, p. 148 を参照せよ．

(59) 最後になったが，本稿を完成するにあたり，いつものことながら畏友森安孝夫，荒川正晴両教授から貴重な助言を頂いた．ここに記して謝意を表す．